



人権と平和は
21世紀のキーワード

〒720-0061 福山市丸之内1-1-1
TEL 924-6789 FAX 924-6850

jinken-heiwa-shiryokan@city.fukuyama.hiroshima.jp

企画展「シベリア抑留の記録・原画展」

2016年6月4日(土)～7月18日(月)



スケッチブックの最初の絵。抑留される5人の後ろ姿が描かれている。「終戦8日遅れの8月23日、元満州延吉に收容される。日本帰国ということで、衣類食料を持てるだけ背負う」の文章が添えられている。

抑留生活を描いた原画28点を展示

今年(2016年)2月、旧ソ連(現ロシア、以下「ソ連」と表記)によるシベリア抑留体験を描いた故・大村孝三さんの絵28点を、ご遺族(北吉津町)から寄贈されました。

絵に題名はありませんが、その多くに短文が添えられ、強制收容所(ラーゲリ)に送られる様子や極寒の中での重労働など、抑留の過酷さを伝えています。

大村さんは、1924年に神戸市で生まれ、1944年に徴兵された後、旧満州の関東軍に配属。終戦後、ソ連のシベリアに送られ、複数の施設で抑留されました。1948年11月、ナホトカ経由で舞鶴に戻り、帰国しました。

そして、2000年2月に亡くなりました。

シベリア抑留とは

1945年(昭和20年)8月9日午前零時、ソ連は、日ソ中立条約を一方的に破棄して、日本に宣戦を布告。旧満州(中国東北部)、北朝鮮、樺太(サハリン)、千島に対して一斉に武力侵攻を開始しました。

6日後に敗戦。武装を解除された日本兵と民間人、約60万人がシベリアをはじめ、ソ連領内の捕虜收容所(ラーゲリ)に送られ、1年から11年にわたって強制労働に従事させられました。この抑留は、「ポツダム宣言」違反であり、また国際ルールを無視した行為でした。死者は、6万2千人を超えました。



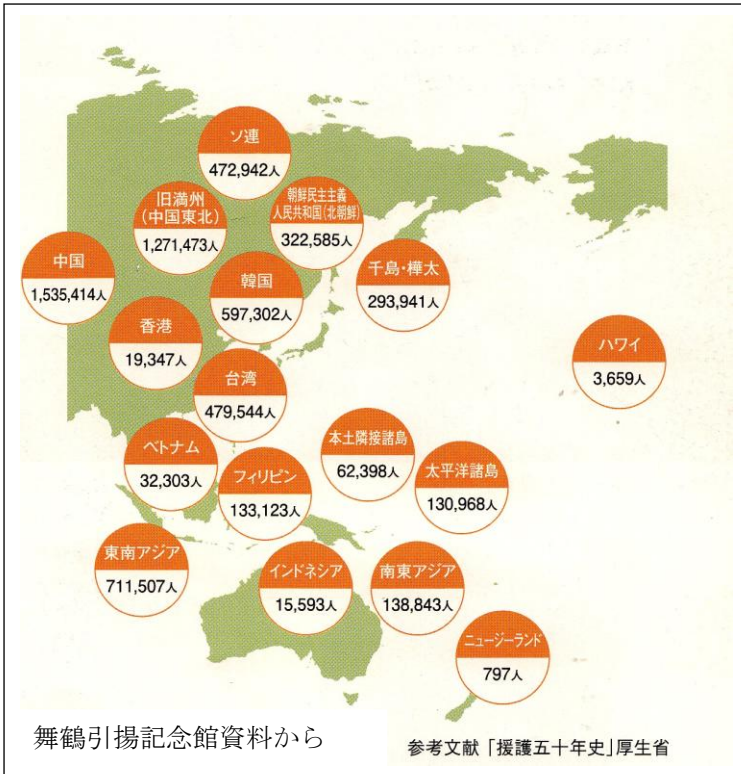
舞鶴市「舞鶴引揚記念館」内
強制收容所(ラーゲリ)の様子

日本の敗戦と引き揚げ

近代化の中で、日本は台湾と南樺太（サハリン）を領有し、中国東北部（満州）に権益を獲得、さらに韓国を併合しました。

昭和期に入ると、日本は中国大陸から東南アジア・太平洋方面へとさらに勢力を拡大し、大東亜共栄圏を構築しようとするなど、海外に多くの領土や支配地を抱える帝国を形成しました。

しかし、太平洋戦争の敗戦の結果、海外にいた約 660 万人（当時の人口の約 9%）の軍人・軍属と民間人が一斉に日本本土への引き揚げを余儀なくされました。



シベリア抑留の背景

ソ連による旧敵国側の軍人と民間人の抑留は、戦争により大きな人的被害と物的損失を被ったソ連における、戦後復興を担う労働力不足を補うための措置として行われました。

トウキョウ ダモイ

ソ連軍に投降した多くの日本兵や一部の民間人は、「トウキョウ ダモイ」（東京へ帰してやる）と言われましたが、実際にはシベリアをはじめとするソ連領内へ強制連行されました。



収容所の中の様子。「シラミとり」「炊事場のごみ捨てから馬鈴薯の皮を拾い、ペーチカ（暖炉）で焼いて食べる」など。

抑留中の生活

氷点下の環境の中、森林の伐採や炭鉱の採掘、鉄道の建設といった重労働に従事させられました。衛生状況も劣悪で、体中にノミやシラミがわき、赤痢やコレラといった伝染病が発生し、多くの犠牲者が出ました。

食料事情は悪く、慢性的な「飢え」が常につきまとっていました。そのため、兵舎での食事においても、ご飯を食べるはしと小石で作った即席の天秤が、平等に食料を分けるために使われ、1グラムの差でも許されない緊迫した状況がそこにありました。